（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　三　上　　喜　孝

三上喜孝氏の論文『日本古代貨幣流通史の研究』は、７～１２世紀の日本古代における貨幣流通の歴史的展開について、現物貨幣の存在形態や地域社会に注目しながら、全体的な見通しを提示した意欲的な研究成果である。

研究の特徴は、銭貨のみではなく現物貨幣に注目しながら貨幣を総体的にとらえる点、地域社会の視点にもとづき新しい出土資料をふくめて考察する点、古代貨幣から中世貨幣への展開について積極的に展望した点などにある。

幅広く明快な論旨の中では、日本古代において、東国における布や西国における米・綿などが現物貨幣として機能したことを指摘し、各地域社会ごとに複数の現物貨幣が流通したことを確認したこと、古代国家の発行する銭貨がそうした複数の価値体系の一元化をめざす政治的機能を果たしたこと、また「皇朝銭」の衰退とともに十一世紀に絹が貨幣化したことなどを明らかにしたほか、「皇朝銭」以降十二世紀半ばに渡来銭が流通しはじめるまでの貨幣の歴史的展開を跡づけている。

従来の銭貨中心の貨幣流通史研究に対し、現物貨幣を視野に入れながら七世紀から十二世紀までの貨幣流通史を展望した幅広い論旨は、大いに評価されよう。

なお七世紀後半の富本銭を流通貨幣ととらえないことについては有力な異論があり、また銭貨の研究史や祭祀・儀礼面での機能などへの論及がさらに望まれるものの、現物貨幣のあり方を明らかにして古代貨幣の歴史的展開について新しい見通しを提示した点で、本論文は、今後の研究に基礎をもたらした有益な研究成果ということができる。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するのにふさわしい論文であると判断する。